

皇帝ペンギン

2005(平成17)年7月24日鑑賞(心齋橋パラダイスクエア)

★★★



監督・脚本=リュック・ジャケ/声の出演=ロマーヌ・ポーランジェ(石田ひかり)/シャルル・ベルリング(大沢たかお)/ジュール・シトリュック(神木隆之介)/ギャガGシネマ配給/2005年フランス映画/86分)

第3章

DVDでもじっくり楽しみたい

……南極で暮らす皇帝ペンギンの「生命の営み」を追うため、8880時間ものフィルムを回した感動のドキュメンタリー。あの艶やかな黒い燕尾服をまとった皇帝ペンギンたちの大行進の意味は？ 1コの卵を産み、孵化させ、産まれた子供を一人立ちさせていくのは大変な営みだが、それは同時に動物と自然との苛酷な生存競争！ あらためて生命と地球の大切さを実感！

皇帝ペンギンは何類……？

南極大陸に、皇帝ペンギンがいることは一般によく知られている。ところで、なぜ皇帝ペンギンという名前がつけられているのかというと、あの艶やかな黒い燕尾服をまわってヨチヨチと歩く姿はある意味滑稽だが、別の見方をすれば、非常に高貴な姿に見えるため……？

ところで、この皇帝ペンギンが生物学的に何類に属しているか、あなたのご存じだろうか？ パンフレットによると、「皇帝ペンギンは、素晴らしい海洋の潜水鳥で、400~500メートルの深さを20分間、無呼吸で潜ることができます」とのこと。サテあなた、そんなこと知っていた？

感動的な4つの大行進！

この映画は皇帝ペンギンの命がけの4つの大行進を感動的に描いている。第1は「キャラバンの長い行進」。これは南極大陸に冬の兆しが訪れる3月に始まる、オス、メスを総動員してのオアモックへの大行進だ。オアモックとは唯一、皇帝

ペンギンが安心して子供を生み、育てられる場所。そこで、ただ1羽の結婚相手(交尾相手)を選び、卵を産む。その目的のためだけに皇帝ペンギンたちは20日あまりのオアモックへの大行進を続けるわけだ。第2は「たそがれの行進」。産卵を終えたメスが、卵を孵化させる役割をオス(父親)に託し、自らは餌場を目指して進む、メスだけの大行進。これが2カ月以上続くとのこと。

第3は胃袋にたっぷり食べ物を蓄えた母ペンギンが夫と子供が待ちうけるオアモックに帰ってくるための「月の行進」。早く帰らなければ、4カ月間何も口にしていない父親ペンギンと生まれたばかりの雛の生命が絶たれることに……。

そして第4は、「飢えた者の行進」。愛する妻と再会した後、今度はその雛を妻に託してオスだけが自分の食糧を求めて旅立つ旅。これはもっとも辛く危険な旅で、毎年多くの生命が失われていくとのこと。

さらに2つの行進も

以上4つの行進は、皇帝ペンギンたちが「種の保存」という目的のために行う生命を賭けた自然との壮絶な闘い。しかし、映画はその後の2つの楽しい「行進」も描いている。その第1は生まれたばかりの雛たちが少しずつ母親の元を離れて、一人立ちしていく「自由な雛の行進」と呼ばれるもの。この行進は距離もほんの少しだけだし、なんとも楽しげなもの。そして第2は、たつぷりと餌をとり海から帰ってきた父親と再会した後、雛たちが本当に一人立ちするため、本能的に同期生達(?)と海に戻っていく、「別れの行進」。

8880時間ものフィルム!

この映画は予告編を観ただけでもその撮影の大変さが容易に想像できたが、現実に映画を観て、パンフレットを読んでも、この映画撮影のために回したフィルムは8880時間に及ぶとのこと。映画自体は1時間26分にまとめられているが、そのバックには8880時間ものフィルムがあることにビックリ!

その撮影にはさまざまな物的設備の他、皇帝ペンギンの生態の理解や生活サイクルの把握はもちろん、皇帝ペンギンたちの動きに合わせた気の遠くなるようなカメラワークが必要だったはず。さらに零下40度という温度や時速250kmに及ぶ

激しい「ブリザード」の中での撮影には、凍傷などの怪我や事故も不可避だったはず。そんな多くの困難に立ち向かってこのドキュメンタリー映画を完成させた、リュック・ジャケ監督の執念に拍手！

『宇宙戦争』（05年）を押し退ける大ヒット……!?

7月2日付産経新聞朝刊には「ハリウッド大作 窮地」との見出しが、そして同7月9日付朝刊には「スピルバーグ ペンギンに負ける」との見出しが踊った。すなわち、アメリカでは映画館1館あたりの興行収入で、この『皇帝ペンギン』がステイブン・スピルバーグ監督の『宇宙戦争』を抑えて、堂々の1位をとり、この予想以上の大健闘を驚く声があがっているとのことだ。

さて、日本での反響は……？ 私がこの映画を観たのは日曜日の夕方だったが、観客はほぼ4分の3くらいの入り。そして年齢層もあまり片寄っていない様子。夏真っ盛りとなり、夏休みに入ったのだから、子供連れが多いものと思っていたが、子供客が少なかったのはちょっと意外……。さてこの映画は、アメリカと同じようにこれから客足をのばすことができるのだろうか……？

あらためて考えたい地球温暖化と環境問題

地球温暖化による海面の上昇やオゾン層の破壊、そして文明から遠く離れた南極大陸における生き物たちの体内からの、PCB や水銀など人工的な汚染物質の発見に見られるように、広く環境問題は人類の生存や地球の存続そのものに影響を及ぼす大問題。もっとも、他方で第3次世界大戦が起これば、あるいはそままでいなくても核兵器が発達した今、部分的であっても核戦争が起これば、たちまち人類の大部分は滅亡してしまうから、環境悪化による滅亡よりも核戦争による滅亡の方が先……？ そんな不吉な予想はしたくもないが、そういう現実的な可能性がヒタヒタと迫ってきているのでは……？

このような核戦争の危機感とともに、環境問題の危機についても私たち人間は今こそ真剣に考え、行動すべき時期にきていることはたしかなはず。この映画がそんなことを考えるきっかけになることを私は願っているが……？

2005(平成17)年7月26日記